HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「初めに」あるのは何であるのか ： ヨハネ福音書を読む
Author(s)	佐々木, 啓
Citation	基督教学, 42, 1-32
Issue Date	2007-06-28
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46714
Type	article
File Information	42_1-32.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論　文

「初めに」あるのは何であるのか ―ヨハネ福音書を読む―

佐々木　啓

はじめに

こんにち、私のような研究者と称する者が、新約聖書のヨハネ福音書を冒頭から「批判的（critical/kritisch）」に、すなわち「学問的（scientific/wissenschaftlich）」に読み進んでいこうとするばあい、どのような事態となるか、という実例を示すのが本稿の目的である。

旧約聖書学にせよ新約聖書学にせよ、こんにちの聖書学[一]は、確立されたスタイルをもった学問である。別な言い方をすれば、聖書学というのは、その方法がある意味で厳密に規定された学問なのである。ヨーロッパの啓蒙期に始まる「聖書学」という学問の方法は、「学問的」（すなわち「批判的」）であると同時に、「歴史的」[二]であるとされ、しばしば「歴史的―批判的」方法などとも呼ばれるが、その具体的方法や手順は体系的に整えられている。ここでは話を新約聖書学に限定するが、ある教科書[三]によれば、その方法は以下のような全体的目論見と個別的手順とからなっている。

この教科書によれば、「学問的（批判的）」聖書研究すなわち聖書学の目的は、ありていにいえば、聖書の「主観的」な読み方、あるいは特定の「集団に規定された」読み方を排して、「客観的」で「聖書テキストのよりよい理解」をめざすものである。

次に、この教科書の目次を見ていくことによって、その方法の具体的行程を知ることができる。煩雑になるのを避けるために、ここでは三つにまとめて記述するが、まず初めに新約聖書諸文書の分析の前段階として、①それらの原典であるギリシャ語本文の確定（「原典批判（Textkritik = textual criticism）」）という作業がおかれている[四]。この準備作業（といってもその後の作業の基礎になるという意味では、もっとも重要とも言いうる作業）の後に、この教科書では、新約聖書諸文書の分析過程は、②「共時的側面の読解（Lektüre unter synchronem Aspekt）」と、③「通時的側面の読解（Lektüre unter diachronem Aspekt）」とに大別されている。②の分析には、「テキスト意味論（Textsemantik）」、「語りの分析（Narrative Analyse）」、「語用論的分析（Pragmatische Analyse）」といった比較的目新しい、二〇世紀後半の言語学、文学研究、言語哲学、解釈学などの学問的成果と関連した文献分析の方法が含まれている。③では、「文献批判（Literarkritik）」[五]、「伝承批判（Traditionskritik）」[六]、「編集批判（Redaktionskritik）」[七]など、よく知られた聖書学の方法が順をおってあげられている[八]。これら③の諸方法は、二〇世紀に大きな成果をあげたと考えられる聖書学の基本的な方法である[九]。この教科書の特徴は、そういった聖書学のいわば古典的方法に加えて、②に分類されているような斬新な方法の解説に多くの紙幅を割いている点である。しかし忘れてはならないのは、この教科書の著者が、②に分類されるような「共時的」分析は、③に分類されるような「通時的」分析、すなわち古典的な「歴史的―批判的」研究方法を補完するものとして捉えている、あるいはそうとしか捉えていない、ということである[一〇]。

ところで、私は、不幸にして、そういった聖書学の古典的方法を体系的に教授される機会がないままにいまに至ってしまった。「宗教学」というまったく「聖書学」とは異なる（あるいはもしかすると、いろいろな意味において「聖書学」とは根本的にあい反する）disciplineにおいて「聖書学」を学ぶはめに陥ってしまった私は、当初からもっぱら②に分類されるようなテキストの「共時的」分析方法に関心があり、上述のような古典的と呼びうる聖書学の「通時的」諸方法には、現在にいたっても、いくつもの根本的な疑問を拭いきれないでいる。本稿は、方法論を主題として

論じようとするものではないが、以下の論述においては、そういった私の方法論上の疑問のいくつかを顕在化させることもめざしている。

本論　ヨハネ福音書の緒論的問題へのアプローチ

解説書であれ、注解書であれ、入門的なものであれ、専門的なものであれ、緒論として、新約聖書の文書、とりわけ福音書のばあいも、それが、いつ、どこで、だれによって、どのような目的で（あるいはだれに向かって）、書かれたのか、などの議論が「初めに」重要な部分をなす。そういった問いにたいしては、冒頭におかれているにしても、当該福音書全体を原典（ギリシャ語）で詳細に分析的に読んだうえで、さらに、その福音書以外、あるいは聖書以外の「歴史的」資料を駆使しながら答えられるものである。したがって、「初めに」あっても緒論は、その文書にかんする最終的な結論であるとも言える。もちろん私は、この福音書テキストを読み進んでいくうえで出合う個別的な問題をすべて検討したうえで、あるいは、そのようにしてこの福音書を最後まで読み通したうえで、そういった緒論的問題を論じることもできるし、あるいはそうすべきなのかもしれない。

しかし、まさしく解釈学的には、理解するとは全体と部分とのあいだの往還なのであり、両者のあいだでの弁証法的運動なのである。そして、私は何度もこの福音書を微細に読んだ者として、もはやそのような往還を避けることはできない。あるいは私は、何の学問的訓練を受けていない平信徒として素朴といえるような読みもできないが、いくぶん学問めかした方法論的観点からいえば、「内在する読者（implied reader(s)）」を規定する「理想の読み（ideal reading）」もできない[一一]。さらにいえば、私は、どんな文書についてであれ、深くイデオロギーに浸透され、かつまた個人的なバイアスのかかった読みしかできない[一二]。そういった読みを可能な限り避けようという志は失いたくはない。

しかし、そのようなイデオロギーやバイアスなど払拭できるのだ、「客観的」な（あるいは「純粋な」でも「正しい」でもいいが、何かしらそういった）読みが可能だ、と高を括ったならば、そのときわれわれは、再びイデオロギーの陥穽に陥るだろう。「学問的」読解といえども、その例に漏れるものではない。

とにかく私は、「初めに」緒論的問題に若干ふれることから、このヨハネ福音書を読みはじめたい。もとより、ここで当該問題について議論が十分なされたなどということにはまったくならない。一つには分量の問題がある。なにしろ、ヨハネ福音書の著者はだれか、という問い一つとっても、ゆうに一冊の本を書かなければならないような世界である。ここでの私の議論など、そういった巨大な問題に爪の痕すら残すこともできないのかもしれない。

基本的に、扱う文書自体以外の直接的な証拠、すなわち「外的証拠（external evidence）」に乏しいのが、「客観的」で「実証的」でもあるはずの[一三]、「歴史的」研究たる聖書学の特徴である。いきおい、それらの文書自体の記述すなわち「内的証拠（internal evidence）」にもとづく議論がさかんとなる。あるいは、そういった議論が複雑化する。これは私見であるが、少ない「外的証拠」にもとづきつつも、「内的証拠」をめぐる、いわば「解釈者〔つまり研究者当人〕のシャマニズム」（〔　〕内は佐々木による）[一四]こそが、実は新約聖書学という「歴史的」研究の真骨頂なのである。

一、パピルス

さきに言及したヨハネ福音書にかんする緒論的問いの「初め」にあげたのは、この福音書がいつ書かれたのか、ということであった。例によって、この「初め」の緒論的問いに対して、答える方法の中心は、その「外的証拠」だけでなく、というよりもむしろまったくその「外的証拠」に頼らないかのごとき、多様な「間接的証言」とヨハネ福音書の記述にもとづく「内的証拠」による推測（＝解釈）である[一五]。しかし、この問いに答えるために役立つ「外的証拠」がある。それは、ヨハネ福音書の「初め」のみならず、すべての新約聖書文書の「初め」として、つまり残存する最

古の新約聖書の写本として、一九二〇年にエジプトで購入され、現在マンチェスター大学のジョン・ライランズ大学図書館に所蔵されており、紀元一二五年ころのものとされている縦が九センチ・メートルほどのパピルス断片である[一六]。

ギリシャ語、ラテン語、ヘブライ語、コプト語、さらにシリア語までもの一次文献を広く読みこなす必要がある「間接証拠」や「内的証拠」の議論は後まわしにして（というか正直なところそのような作業は私の能力を超えるのであるが）、「初めに」このP^{52}などと記号で整理されたパピルスという「外的証拠」を検討してみたい。

実は、このパピルスをいまやわれわれは、ウェブ上[一七]で文字通り手にとるようにみることができる。これは、表にはヨハネ福音書一八章三一―三三節の一部が、裏には同じく一八章三七―三八節の一部が記載されている。以下は、ウェブ頁をご覧になりながら読んでいただきたいが、ためしに、表をこんにちの権威あるギリシャ語新約聖書本文[一八]の対応箇所（ヨハネ福音書一八章三一―三三節）に重ねてみると、以下のようになる[一九]。

εἶπεν οὖν αὐτοῖς ὁ Πιλᾶτος· λάβετε αὐτὸν ὑμεῖς καὶ κατὰ τὸν νόμον ὑμῶν κρίνατε αὐτόν. εἶπον αὐτῷ **OI IOYΔAIOI· ΗΜΙν οὐκ ἔξεστιν ἀποκτεῖναι OYΔENA· ΙΝΑ Ο** Λόγος τοῦ Ἰησοῦ πληρωθῇ ὃν εἶ**ΠΕΝ ΣΗΜΑΙΝ**ων ποίῳ θανάτῳ ἤμελλεν ἀπο**ΘΝΗΣΚΕΙ**ν. Εἰσῆλθεν οὖν πάλιν εἰς τὸ πραι**τώΡΙΟΝ Ο** Πιλάτος καὶ ἐφώνησεν τὸν Ἰησοῦν **ΚΑΙ ΕΙ**πεν αὐτῷ· σὺ εἶ ὁ βασιλεὺς τῶν Ἰουδαί**Ων**;

（大文字太字部分が読み取れる箇所。）

ピラトは彼ら〔ユダヤ人たち〕に言った。「お前たちが彼〔イエス〕を連れて行って、お前たちの律法で彼を裁け」。**ユダヤ人たちは**彼〔ピラト〕に言った。「**われわれは誰かを**死刑にする権限**など**持っていない」。〔ユダヤ人

たちがそう言ったのは）どんな死を死のうとしているかを暗示して言ったイエスの言葉が実現されるためである。そこでふたたび、ピラトは官邸に入り、イエスを呼んで、そして彼に言った。「お前はユダヤ人たちの王か」。

（多少無理があるが対応箇所を太字にした私訳。）

さて、ここまでならば、べつにギリシャ語が読めなくとも、多少説明を受ければ、視覚的に誰でも確認できることであろう。なるほど、このパピルスとおぼしき切れ端には、こんにちのヨハネ福音書の一部が記されているようである、と。しかし、厄介なのはここからである。

ヨハネ福音書は、「おそらく一世紀の最後の一〇年間に成立したとする見方では、ほとんどの研究者の意見が一致している」[二〇]、などと概説書には記されている。もちろん私もこのような学界の趨勢は承知している。そしてどうやら、ヨハネ福音書の著作年代にかんするこういった推測の背後に隠然とあるのは、他ならぬこのパピルスの年代にかんする推定なのである。クラウス・ウェングストという研究者が次のように書いている。

…ヨハネ福音書はこれまですでに比較的正確にその著作年代が定められている。たいていのばあい、一世紀の最後の一〇年と推測されている。そう推測するもっとも重要な証拠は、パピルス52であり、それは古書体学上の（paläographisch）指標によると、紀元二世紀の前半のものである。「当時すでにヨハネ福音書がエジプトで知られていたならば、それが成立したのは一世紀から二世紀への変わり目の時期とみなされるだろう[二一]。

私はこういった記述にたいして、いくつもの疑問がわく。このパピルス断片を紀元一二五年ころのものと提案したのは、当時オックスフォード大学の研究員だったコリン・ヘンダスン・ロバーツであるが[二二]、ブルース・M・メッ

ツガーによれば、「錚々たる書字学者〔＝古書体学者〕たちはロバーツの判断に賛意を表している」[二三]とのことである。「錚々たる」学者たちの言うことを、いたずらに疑う必要もないが、残念ながら、まず、「古書体学上の指標」によるこのロバーツの判断の真偽を直接検証する能力を、私は持ちあわせていない。ここで私は、学問（science）の基本である「実証的」態度を捨て、その筋の権威には従うという「信念」の領域に入ってしまう。しかし思うに、いわゆる新約聖書学者たちのうちいったい何人が、こういった「古書体学上の」判断を直接下せるのであろうか。

それはともかくとして、メッツガーが続けて次のように書くとき、私の疑問はさらに深まる。

保存されている内容はごくわずかであるが、ある点でこの小さなパピルスの断片は完全な写本に劣らぬ証言的価値をもっている。ちょうどロビンソン・クルーソーが砂浜に一つの足跡を見て、同じ島に二本足の人間がもう一人いると判断したように、P^{52}は、二世紀の前半に、伝承に言われている著作の地（小アジアのエペソ）を遠く離れたナイル川のほとりの地方都市に第四福音書〔ヨハネ福音書〕が存在し、使用されたことを証明する[二四]。

私の疑問とはこういうものだ。ロビンソン・クルーソーを持ち出した巧みな比喩に惑わされそうになるが、先に示したように、こんにちのヨハネ福音書の一部と思われるほんのわずか数節を記したパピルス断片が存在しているだけなのに、いったいどうして、すでに完全な形の――とメッツガーは書いていないが、文脈からはそう読めるだろう――「第四福音書〔ヨハネ福音書〕が存在し、使用され」ていた、などと断言できるのだろうか。ウェブ上でいまいちど確認していただければいいが、当然のことながら、このパピルス断片には、現代の書物に見られるような書名などを記したヘッダーがあるわけでもない。したがって、私ならば、このパピルスとそれにまつわる本稿で言及している書籍による情報などがすべて真正なもので、「錚々たる」碩学たちの判断が正しいとしても、言いうるのは、紀元二世紀の

前半に、後にヨハネ福音書と呼ばれることになる文書の一部、一八章の終わり三分の一くらいとほぼ同じ文書がエジプトに存在していた、ということだけではないだろうか。孤島の砂浜の人間の足跡は、確かに人間の存在を推測させるかもしれないが、福音書断片から福音書全体の存在をただちに仮定することは行き過ぎではないか、という疑問は不当だろうか。

さらにメッツガーは続けて、「もしこの小さな断片が前世紀の中葉に知られていたなら、かのすぐれたテュービンゲン大学教授、フェルディナント・クリスティアン・バウア（Ferdinand Christian Baur, 1792-1860）に影響を受けた新約聖書批評（＝批判）の学派が、第四福音書の成立は一六〇年以降であると論じることもなかったであろう」[二五]などとアイロニカルに書いているが、これにも私は同意できない。たとえ、P^{52}が存在したとしても、（上記の私のようにも考えられるわけであるから）バウアはべつにそれを根拠に自説を曲げる必要はないのではないか。もとより、彼のようにヨハネ福音書の著作年代をより遅くに推定する根拠は他にあるかもしれない。

さて、さらにいくつかのパピルス断片や写本が、ヨハネ福音書の著作年代を探るうえで重要である。それらは、二〇〇年頃のものとされるP^{66}[二六]、三世紀のものとされるP^{45}[二七]やP^{75}[二八]などと記号化されたものである。さらに、古いものとして、二世紀のものとされP^{90}[二九]と記号化されたパピルスは、最近詳細が明らかにされたようだが、やはり、こんにちのヨハネ福音書の一八章三六節―一九章一節と一九章二節―七節を含むだけの、P^{52}のような断片にすぎない。つまり、いまのところ、二世紀のものとみなされる新約聖書のパピルスは、ごく断片的なものしか存在していないということである。またそれらは、（マタイの一部が記されたP^{104}を除くと）みなヨハネ福音書の断片だということも記憶しておいていいかもしれない。

それに対してP^{66}やP^{45}は複数枚のパピルスを綴じた冊子（コーデクス）状のものであり、ヨハネ福音書自体も、現在と同じような一定の文章形態をなしていたことが推定できる[三〇]。

いずれにしても、上記のように私が研究書や解説書のたぐいから読み取ったすべての情報が間違っていないとするならば、まがりなりにもヨハネ福音書全体を含んだ写本というのは、少なくとも考古学的には、現在のところ、三世紀をまって「初め」て出現するようである。だが、またもや残念なことに、さきにP[52]にかんしてネットを利用して行なったような探索がせいぜいのところで、研究書や解説書のたぐいから読み取れる個々の情報について、その多くの真偽を私は直接判断できないのである。けっきょく、ここでもまた私は、自ら「実証」するというよりも、権威筋への「信頼」を余儀なくされる。

しかし、とりあえず、ヨハネ福音書の著作年代の決定という緒論的問題をめぐって、いろいろな意味で「初めに」なにがあるのかということを考えながら、パピルスという「外的証拠」にかんする議論に私なりに決着をつけることはできた。

二、間接的証拠

さきに述べたように、ヨハネ福音書の著作年代の決定という緒論的問題に答えるには、前節一で扱ったようなパピルスという「外的証拠」とともに、ときにはそれ以上に重視されるのが、以下で論じようとする「間接的証拠」、すなわち教父と呼ばれる初期キリスト教の思想家たちなどによる「ヨハネ福音書」なるものへの言及である。ここで私はどうしても「ヨハネ福音書」と括弧に入れたくなる。以下でいくらか見るように、教父たちは「ヨハネ福音書」を直接引用したり、間接的に引用したりしていると論じられてきた。しかし、そうだからといって、彼らが言及しているとされる（あるいは言及しているように思われる）「ヨハネ福音書」なるものが、われわれがこんにち手もとに持っているヨハネ福音書と完全に同じものであったかどうかは、にわかに判断できないからである。つまり、そういった教父たちなどによる引用・言及とされるものを個々に厳密に検討してみなければ、彼らが言及している「ヨハネ福音

書」が、こんにちのヨハネ福音書とまったく同じものであるのかどうかは即断できない。実は、その主の研究もすでに膨大にある。それならば、一定の結論に到達したかといえば、そうではない。とりあえずこんにちの趨勢というものはあるようにも思えるが、私には事態は流動的でけっして最終的な結論に到達しているわけではないように思われる。

もう一度確認しておきたい。ここまで行なってきたのは、ヨハネ福音書が書かれたのはいつか、という問いに答えを見出そうという試みの検証である。とりあえず、ここでいうヨハネ福音書とは、現在われわれの手もとにある一章一節から二一章二五節までのいちおうまとまった形の文章のことである。前節一では、そのような文書の存在を示す「外的証拠」＝「物証」であるパピルスは（くどいようだが、各パピルスについての諸家の年代決定などが正しいとして）三世紀、二〇〇年以降のものだ、ということである。つまり、もっとありていにいえば、それ以前の「ヨハネ福音書」というものは、もしそれが存在していたとしても、こんにちのヨハネ福音書とまったく同じものというわけではない可能性を考えることは不合理ではないだろう。これは私見であるが、多くの研究者たちは、現在のヨハネ福音書と同じ文書が可能な限り早くに成立していたことを論証しようとするあまり、そのような可能性をあまり追求しようとしない。むしろ研究者たちは、できるだけ早い時期のキリスト教内外の著作家たちの文書の中に、こんにちのヨハネ福音書の痕跡を探し出そうとやっきになってきた。

そういったごく早い時期（一世紀～二世紀）におけるヨハネ福音書の痕跡を探るうえで、ターニングポイントとなるのは、ルグドゥヌム（こんにちのフランスのリヨン）の司教エイレナイオス（Eirenaios, ca.130-ca.200）、その主著『対異端駁論』（*Adversus Haereses*）である。なぜなら、エイレナイオス以前の初期キリスト教文献においては、ヨハネ福音書を文字通り引用したものは少なく、それを出典としてはっきり指示したものはほぼ存在しないと言っていいからである[三]。

しかし、そのほかさまざまな初期キリスト教関係の文献に、ヨハネ福音書との関連、とくにこの福音書を実際に読んで知っていた痕跡を指摘することがなされてきた。それら初期キリスト教の文献とは、いわゆる「使徒教父文書」の諸文書[三三]、『ペテロ福音書』[三三]や『ヨハネ行伝』[三四]、『使徒たちの手紙』[三五]といった新約聖書外典、殉教者ユスティノス（Ioustinos, ca.100-ca.165）の『第一護教論』や『ユダヤ人トリュフォンとの対話』[三六]、サルディスの主教メリトーン（Meliton, ?-ca.190）の『受難について』[三七]、タティアノス（Tatianos, ca.120-?）の『ディアテッサロン（四福音書の調和）』[三八]、もっとも古いキリスト教の頌歌集である『ソロモンの頌歌』[三九]、などである。

さらに、エピファニオス（Epiphanios, ca.315-403）の「アロゴス派」についての解説[四〇]や、ヒッポリュトス（Hippolytos, ca.170-235/236）がグノーシス主義者バシレイデス（Basileides, 二世紀中頃）の著作を要約したというもののなかの言葉[四一]や、オリゲネス（Origenes, ca.185-254）が自己の『ヨハネ福音書注解』で言及しているグノーシス主義者ヘラクレオン（Herakleon, ca.145-ca.180）のヨハネ福音書についての注解[四二]の存在なども、こんにちのヨハネ福音書と同じものが一世紀の終わりから二世紀の前半にはすでに存在していた、ということを示す間接的な証拠として提出される[四三]。

これらの文献とヨハネ福音書との関係をここで個別に十分論じることはできないが、いずれにせよ、言えることは、さきに記したように、「ゼベダイの子」、「主の弟子」つまり使徒たる「ヨハネ」という名をあげてその福音書にはっきり言及しているのは、エイレナイオスが「初め」てなのである。また、こんにちでは、「内的証拠」によってヨハネ福音書の成立自体を早く（一世紀末の最後の十年と）見積もることと関連して、ここで記したような文献を持ち出して論証するスタイルは後退しているようにも思える。だからといって、ヨハネ福音書の著述年代が確定したわけではない。上記の記述（や当該部分の注）だけでもその片鱗がうかがえるように、かなり錯綜した議論は避けられないのである。

三、エイレナイオス

さて、最後にエイレナイオスその人について考察を進めてみよう。問題となる文献は、一八五年頃に書かれたとされる彼の『対異端駁論』と呼ばれる全五巻の著作であり、初期キリスト教におけるある種の集団、すなわち、成立しつつあるカトリック教会から異端とみなされる（主にヴァレンティノス派を中心とする諸）集団の教説を論駁しようと試みたものである[四四]。全体はラテン語訳のみしか現存しないが、原語であるギリシャ語断片も残されており、それと比較検討することによって、エイレナイオスのラテン語訳はギリシャ語を非常に正確かつ忠実に翻訳しているといわれる[四五]。

この著作では、大まかに言うと、第一巻で、いわゆる異端の教説をエイレナイオス自身の否定的論評を交えて紹介した後、第二巻では、それらの教説の基本的なところを論駁し、第三巻以降では、エイレナイオスが自身の神学思想を展開する、という構成になっている。何よりも本書の重要性は、パウロの手紙や四つの福音書を中心に、こんにちの正典新約聖書の諸文書を権威あるものとして縦横に用いながら、つまり具体的にいえば、新約聖書諸文書を（たとえば、「ヨハネ福音書による」のように）明示的に、あるいは（そういった導入句なしに）暗示的に引用しながら、自らの論を展開しているということである。

エイレナイオスは、この著作において、最終的に新約聖書正典文書となるもののなかから、パウロの手紙群、ルカ文書（ルカ福音書と使徒言行録）、マタイ福音書についで、四番目に多くヨハネ文書（ヨハネ福音書、ヨハネ黙示録とヨハネの手紙一～二）に言及しているとされるが、引用されている章句でいえばヨハネ文書が他をしのいでいるともいわれる[四六]。手紙と福音書を含むヨハネ文書への言及は、この『対異端駁論』全体の二〇％ほどの分量をしめる

第三巻においてもっとも多く、それは他の巻に比べておおよそ二倍くらいであるとされる[四七]。いずれにせよ、「エイレナイオスをまって「初め」て、彼が、ヨハネ福音書あるいはヨハネ文書を、教会における脇役の位置あるいは異端的な集団から引き離し、「正統の（orthodox）」、「次第に正統派となる多数派教会（Großkirche）」、すなわちローマ教会に導きいれた」[四八]のである。

さて、上記のように概観されるエイレナイオスによるヨハネ福音書の受容、とりわけその明示的・暗示的引用の具体例をここで少し検討してみよう。まず、第三巻の一・一には、四つの福音書の由来が書かれているが、ヨハネ福音書については次のとおりである[四九]。

> 次に、ヨハネ、主の弟子、彼は主の胸もとに寄りかかっていたその人であるが、彼もまた福音書を編纂した。そのとき彼はアジアのエフェソに滞在中であった[五〇]。

この記述を見るだけでも、エイレナイオスがヨハネ福音書という文書そのものを用いていたことは明白だ、と説かれる。なぜなら、ここで「胸もとに寄りかかっていたその人」と訳した、エイレナイオスの記述ὁ καὶ ἐπὶ τὸ στῆθος αὐτοῦ ἀνέπεσεν は、こんにちヨハネ福音書二一章二〇節のギリシャ語原文とされているὃς καὶ ἀνέπεσεν ἐν τῷ δείπνῳ ἐπὶ τὸ στῆθος αὐτοῦ「食事のときイエスの胸もとに寄りかかっていた〔者〕」を、自由に、つまり少し並べ替えて引用したように見えるからである。

ところで、このエイレナイオスの『対異端駁論』における、こういった新約聖書の引用や暗示については、この著作における新約聖書の引用箇所についての索引を見渡してみるだけも[五一]、いろいろ興味深いことに気づく。

まず、さきに記したように、福音書間での比較という点でみると、明示的・暗示的の別を問わないとすると、マタ

イ福音書と（使徒言行録を含む）ルカ文書への言及はほぼ同じくらいの数に見え、次にヨハネ福音書への言及が多いことはすぐに見てとれる。顕著なのは、マルコ福音書への言及の極端な少なさである。

ヨハネ福音書に話を戻すと、ヨハネ福音書一節一節の痕跡が、つまり、何らかの仕方でのヨハネ福音書への言及が、エイレナイオスの『対異端駁論』の文中に見られないかどうかをしらみつぶしに行なっていく作業がなされている[五二]。

そういった業績を利用させてもらうなら、ヨハネ福音書冒頭の一節、一章一節「初めに言があった。…」だけに限っても、暗示的なものや思想上の類似などを含めたその引用と思われる箇所は、この『対異端駁論』の第三巻だけで、二〇箇所も数えあげられる[五三]。ただ、ヨハネ福音書ギリシャ語原典の存在やその本文のようすを知る資料として用いたい立場からすると、どうしてもラテン語訳だけではなく、『対異端駁論』の方も、そのギリシャ語原典を知りたいわけである。そうすると当該箇所の数はかなり限定されてしまう。

第三巻の一一・一には、ヨハネ福音書冒頭の一章一節―五節が「福音書による教え（secundum Euangelium doctrina）」として引用されているが、ラテン語訳である。簡潔な章句であるので、こんにちの原典ギリシャ語とほぼ同じとも判断できるが、翻訳であることにかわりない[五四]。それにたいして、同じく一一・八にはギリシャ語断片が残っており、そこでは、ヨハネ福音書の冒頭一章一節が、こんにちこの福音書のギリシャ語テキストとしてもっとも権威あるものと認められ、われわれの研究の下敷きとなる本文[五五] Ἐν ἀρχῇ ἦν ὁ λόγος, καὶ ὁ λόγος ἦν πρὸς τὸν θεόν, καὶ θεὸς ἦν ὁ λόγος.とまったく同じギリシャ語が引用されている。そしてこれは、「ヨハネによる（κατὰ Ἰωάννην）（福音書）」がそう言っている（λέγων）というのである[五六]。

そもそも全体としてはラテン語訳しか残っていないこのエイレナイオスの『対異端駁論』には、こういったギリシャ語原文でヨハネ福音書の引用と確認される箇所は実はそれほど多くはない。ヨハネ福音書の個々の章節や、『対異端駁論』の全体にわたってこの種の検討作業を続けることは興味深くもあるが、ここではとうてい行なえない。そ

こで、先を急がざるをえないが、全体としてみたばあい、エイレナイオスの『対異端駁論』におけるヨハネ福音書への言及にかんして、次のようなことは確認できる。そこには、まず、こんにちヨハネ福音書とされるギリシャ語原文とまったく同じ、あるいは非常に近い直接的引用が見られる。それは、上記の例のように、ときに「ヨハネ福音書」（かぎ括弧にいれる理由については前述）の章句としてはっきり明示されている[五七]。

しかし、私は、こういった『対異端駁論』にさまざまに見られる「ヨハネ福音書」の痕跡から、こんにちあるようなヨハネ福音書ギリシャ語原典と同じものをエイレナイオスが眼前にしていた、とはただちに断言できないのではないかと訝る。たとえば、オリゲネスの『ヨハネ福音書注解』などからは、彼が実際に目にしていたと思われる「ヨハネ福音書」のかなりのギリシャ語原文が復元できる[五八]。しかし、エイレナイオスの『対異端駁論』などから、そのようにしてエイレナイオスが目にしていたのかもしれない「ヨハネ福音書」ギリシャ語原典を逐語的に再現することは、ほとんどできないと思われる。その理由は、オリゲネスの方はそもそも注解書であるから、おおいにヨハネ福音書原典を引いたり、それについて論じたりするのがあたりまえであるが、エイレナイオスの方はそうではないからである。また、そもそも『対異端駁論』が全体としてはラテン語でしか残っていない、ということが、オリゲネスに対するのと同種の試みをエイレナイオスについて行なうことを困難にしている。

さらに、エイレナイオスによるヨハネ福音書の引用の仕方は、明示的であれ暗示的であれ、あるいは逐語的引用であれ、自由な引用であれ、非常に偏っている。これは、オリゲネスの事例とは異なり、ヨハネ福音書全体について満遍なく論ずべき注解書でない以上、仕方のないことかもしれない。だが、どのように偏っているかといえば、第三巻だけに限定すると、何らかのかたちでのヨハネ福音書への言及一五〇のうち九二が、（全部で二一章ある）ヨハネ福音書の第一章だけにかんするものである。しかも、そのうち七九は一章一―一八節のいわゆる「プロローグ」の部分である[五九]。そしてさらに、（いわゆる「仮現論」を専売特許とするグノーシス主義者たちを論駁するのであるから）

予想されるように、それらのなかでも一章一四節への言及が二一と、一章一節への言及二〇と並んでもっとも多くなっている[六〇]。こういった偏りは、『対異端駁論』全五巻全体についても認められる[六一]。

このような偏りと思われるものにもう少し触れておこう。たとえば、さきに言及した二一章二〇節を除けば、二一章についての言及は見られない[六二]。また、ヨハネ福音書からの文字通りの引用といえるものには、もっともヨハネ福音書に特徴的ともいえるイエスの言葉にあたるものがほとんどであり[六三]（奇跡行為など）物語部分への言及は淡白といってよい。二章のカナの婚礼の話などは、第二巻の二二・三で、あらすじが述べられているだけである。六章のパン五つと魚二匹で五千人を満腹させる物語なども、同様の薄い扱いである[六四]。また、近年、ヨハネ福音書の著作年代の決定などにとっても非常に重要視される、生まれつき目の見えない人の癒しの記事がある九章などについても、エイレナイオスは、癒しのドラマ自体にはそれほど言及していない[六五]。

以上の考察から、このエイレナイオスの『対異端駁論』を根拠にして、こんにちわれわれの手もとにあるものとまったく同じヨハネ福音書ギリシャ語原典が彼の手もとに存在していたと考えるのは早計かもしれない、と私は考える。これは通説に挑戦的な大胆な考えであることは認める。しかし、私の素朴な疑問と、現在までのところの探究から、この私の「珍奇」といわれそうな推測の可能性をどうしても捨てきれないのである。エイレナイオスの時代にまだ福音書自体が存在していなかったとまで言うつもりはない。「外的証拠」＝パピルスも、「間接的証拠」＝少なくともエイレナイオス自体の文献における明示的・暗示的な引用も、たくさんあるのだから。しかし、現在われわれの手もとにあるようなかたちと同じヨハネ福音書のギリシャ語原典福音書が、エイレナイオスよりずっと以前から本当にあったのかどうか、ということに私は疑問を持つのである。前述のメッツガーの比喩を使わせてもらうなら、砂浜の足跡があまりに多くて、しかも、はっきりしたものやらぼんやりしたものやら、あまりに多いので、人間と、たとえばサルを取り違える、ということはないのだろうか。確かな人間、すなわちこんにちわれわれが持つ福音書の存在を確か

に示す外的証拠、断片ではないある程度まとまったパピルスが存在するのは、さきに述べたように二〇〇年以降である。二世紀の後半に至るまで、少なくともヨハネ福音書は、はっきりとした形をとらない、いわば太陽系誕生以前のガス雲状態だったのかもしれない、というのはあまりに空想的な妄想だろうか。

そうでもないかもしれない。それはブワスマール（M. -É. Boismard, 1916-2004）らの一見奇妙なヨハネ福音書研究[六六]を目にするからである。これについてここで詳述する余裕はもはやないが、ようするにブワスマールらが試みているのは、本稿でも利用しているこんにちのヨハネ福音書ギリシャ語原典、世界中のほとんどの新約聖書研究者たちが定本として用いるネストレ＝アーラント（Nestle-Aland）版に抗して、クリュソストモス（Chrysostomos, ca.347-407）の説教（ないし注解）を手がかりに、彼の利用していた「ヨハネ福音書」を再構築しようということである。結果的に、彼らは、実はヨハネ福音書のいわば別版[六七]があったのではないかということを主張しているのと等しい。細かい問題はいろいろあるのだが、そのようにして再現されたクリュソストモスの「ヨハネ福音書」に非常に特徴的な点を一つだけ記しておこう。それは、上記エイレナイオスのヨハネ福音書の引用の問題でふれた、現在のヨハネ福音書冒頭の有名な「プロローグ」が、このクリュソストモスの「ヨハネ福音書」にはないということである[六八]。これは、上記で述べたように、エイレナイオスのヨハネ福音書への言及が「プロローグ」に集中していることと比べると、対照的な相違である。

これは私の考えだが、新約聖書学というのは、とにかく「初めに」新約聖書ありき、という前提の上で議論が進められているように思われる。しかし、もっとも不明確なのは、いったいいつ、だれによって、たとえば福音書は書かれたのか、ということなのである。それを、ほとんど福音書自体の内部証拠によって推測しようとするのは、私にはあまり「歴史（学）的」態度だとは思われない。さらに、「奇妙な論理でものを考える」「古代人」[六九]エイレナイオスを、聖書の引用に限っては、現代人と同じ誠実さと正確さをもってそれを行なっていると、それほど安易に認めてよいのだろうか。こんにちでは「少数の保守的研究者」のみが「固持」するような「伝承（＝伝説）」を記す[七〇]エイレナイ

オスについて、聖書の引用に限ってそうやすやすと信用していいのだろうか。よもや、エイレナイオスが、「新約聖書」や「福音書」にかんして、創作やでっちあげをおこなったとは言わないまでも、エイレナイオスを信頼するのか、しないのか、現代の研究者たちは、エイレナイオスをはじめとする初期キリスト教の「伝承」の扱いにかんして、ダブルスタンダードになっている、というのは言い過ぎだろうか。

おわりに

本稿を最初に構想したとき、私は、少なくともヨハネ福音書一章一節の私訳にまでは到達しようと企てたが、やはり無理だった。ヨハネ福音書を読む前に、この私ですら、「初めに」これくらいのことは（というかこれでも足りないくらいだが）論じなければならなかった。そして、本稿の議論もまた、ヨハネ福音書の劈頭の一文 Ἐν ἀρχῇ ἦν ὁ λόγος に触発されたつもりである。ただ、これを私は、「初めにあったのは言葉である」と訳したいのである。「初めに言葉があった」（『聖書 新共同訳』）のように翻訳することによって存在が強調されるのを避けるところが、新機軸である。しかし、この和訳の正当性を論じるにはさらにいくつもの論文を書かなければならない。いずれにせよ、「初めに」必要なのは、やはりおびただしい分量の「言葉」であった。これらの「言葉」は、ヨハネ福音書のいう「ロゴス（λόγος）」とは異なるものであると同時に、やはりその「ロゴス」の一部なのである。「ロゴス」という「言葉」の目くるめく深遠な意味世界を前にしてたじろぎながらも、すでに私はヨハネ福音書を読み始めていたのである。

初めにあったのは言葉である。
言葉は神とともにあったものである。
（ヨハネ福音書一章一節）

注

一　ちなみに「聖書学」は、ドイツ語ではBibelwissenschaftである。それに対応する英語はBiblical Criticismだと思われる。ところで、大貫隆他編集『岩波 キリスト教辞典』 岩波書店、二〇〇二年、の「聖書学」の項目には、それに「ふさわしい原語」として、ドイツ語のBibelwissenshcaftしか記されていない。しかし、例えば、*The Anchor Bible Dictionary* (New York etc.: Doubleday, 1992) の"Biblical Criticism"の項 (Vol. 1, pp. 725-736) などを見れば、まさしくこれが上記辞典の「聖書学」であることがわかる。「聖書学」は、この種の辞典のたぐいにとってはもっとも重要な項目の一つであると考えられるが、結果的に、『岩波 キリスト教辞典』の「欧文索引」に"Biblical Criticism"という英語が見出せないのは、かなり奇妙である。注一〇も参照。

二　「聖書学」が「歴史的」探究であると称するばあいは、それが聖書を妄信するのではなく、ありていにいえば聖書に書かれていることが本当か嘘か、そのような言い方が乱暴だとするならば、聖書に書かれてあることで「本当に起こったこと」は何なのか、そこに書かれてあることの「本当の意味」は何なのか、といったことを学問的（＝科学的〔scientific〕）に吟味しながら（これが「批判的」の意味でもあろう）、あるいは聖書諸文書から、それらの背後にある「史実」やそれら諸文書成立の「歴史的過程」などを探究する、言い換えれば（近代科学の本質的特徴ともいわれる）「実証的」・「経験的」な「歴史学」である、と自己規定しているのである。以下を参照。*The Anchor Bible Dictionary,* Vol. 1, pp. 725-736. Wilhelm Egger, *Methodenlehre zum Neuen Testament: Einführung in linguistische und historisch-kritische Methoden* (Freiburg・Basel・Wien: Herder, 1990), S. 21.

三　Egger, *op. cit.*

四　この教科書では、「翻訳」も、この段階の作業に含まれている。*ibid,* S. 59ff.

五　これは「記述された〔新約聖書〕文書の前史の探究（Suche nach der schriftlichen Vorgeschichte der Texte）」と

されている（*ibid*, S. 162ff.）。つまり、こんにちの新約聖書諸文書が成立するにあたっては、その下敷きとしてさまざまな「記述された」「原型（Vorlage）」や「資料（Quelle）」が用いられたと考え、そういった「原型」や「資料」を推定したり再構築したりしながら、新約聖書諸文書成立の歴史的考察を行なうのである。

六　これは「口承段階の〔新約聖書〕文書の前史の探究（Suche nach der mündlichen Vorgeschichte der Texte）」とされている（*ibid*, S. 170ff.）。特に福音書などには、前注で述べたような「文書資料」などに先立って「口頭伝承」段階があったという推定にもとづき、そういった「口頭伝承」そのもの、あるいはその段階から文書資料への展開（転換？変換？）などにかかわる諸問題を扱うのである。

七　これは、注五や六で述べた「文書資料」にしろ「口頭伝承」にしろ、そういった諸資料を用いてこんにちある新約聖書諸文書（特に福音書）を作成した人（々）の「編集」作業を再構成し、そういった「編集者（たち）」の意図や思想をも探究しようとするものである。

八　「伝承批判（Traditionskritik）」や「編集批判（Redaktionskritik）」は、「伝承史（Traditionsgeschichte）」や「編集史（Redaktionsgeschichte）」と呼ばれることもある。

九　いまひとつ、よく知られた「様式批判（Formkritik）」あるいは「様式史（Formgeschichte）」という方法があるが、これは、本稿で論じているこの教科書では、②の「共時的側面の読解」の最後に位置づけられている。聖書諸文書にみられる文学的ジャンル（Gattung）や様式（Form）の分類・整理だけならば「共時的」といえるかもしれないが、この「様式史」は、がんらいそういった「様式」の担い手たちの「生活の座（Sitz im Leben）」の「歴史的」推測にまで進む（*ibid*, S. 158）。次注一〇も参照。

一〇　「〔テキスト言語学、意味論、語用論、構造主義的手法など〕これらの新しい諸方法は、なによりも、テキストの共時的側面を把握しようとするのである。それらの新しい方法は、歴史的―批判的作業方法を補完するのであ

るが、それは、それらの新しい方法が、テキストの諸現象の観察を明確なテキスト分析の段階へと進めるからであり、すでに様式史において始められていたテキストの様式の検討（Formalisierung）というプロセスをさらに進展させるからなのである」（*ibid.*, S. 21. ただし、〔　〕内と傍点は佐々木による）。私見によれば、実は、ここにBibelwissenschaftとBiblical Criticismの相違がある。ここでいうところの「新しい方法」を、Bibelwissenschaftつまりドイツの「聖書学」においては旧来の方法を「補完する」もとしてしか捉えないのに対して、（主として）合衆国のBiblical Criticismはそういった「新しい方法」を、旧来の方法と並置するか、それらと対抗的(antagonistic)に捉えるのである（*The Anchor Bible Dictionary*, Vol. 1, pp. 732-736参照）。ウィリアム・ベアード（William Baird）は、「〔この辞典の項目で行なった聖書学の新しいさまざまな方法にかんする〕概観は、歴史批判〔＝「歴史的－批判的」方法〕という啓蒙期以来の〔聖書学の方法の〕モデルが、次第に問題のあるものになってきていることを示唆している。〔そういった新しい方法がなしている〕さまざまな〔旧来の方法に対する〕批判的な提案は、現代の〔聖書にかんする〕探究が、いまだ実現されていない新しいパラダイムを求めているということを示している」と書いている（*ibid.*, p. 736. ただし〔　〕内は佐々木による補い）。注一で言及した、『岩波 キリスト教辞典』の「聖書学」の項目の奇妙な問題は、こういった主としてドイツ経由の聖書学と主としてアメリカ合衆国経由の聖書学とのあいだの相違が、日本の学界における独特な経緯とあいまって現われた事態のように思われる。

二

「内在する読者（implied reader(s)）」を規定する「理想の読み（ideal reading）」とは、簡単にいえば、まったく何の先入観もない、しかし読解力という点でいえば完璧な能力をそなえた読者が、ヨハネ福音書ならば、その福音書をまったく初めて読み進む、ということである。そのさい、読み終えた部分にかんしては完璧な理解と記憶を持っている、といったことなども付随する。そのような意味で、これはまた「理想の読者（ideal reader）」とも言いう

るのである。単純に考えて、そういった存在がかなり胡散臭い理念的構成物であることは、誰にとっても明らかである。本稿は、方法論を主題としていないので、詳述しないが、ここで私が行なっているのは、「血肉をそなえた読者（flesh and blood reader）」、「現実の読者（real reader）」たる、すなわち、「私自身」に定位した「読者―反応批判（reader-response criticism）」の一種であると考えている。以下の著書などを参照。Jeffrey L. Staley, *Reading with a Passion: Rhetoric, Autobiography, and the American West in the Gospel of John* (New York: The Continuum Publishing Company, 1995). 特に、pp. 1-23.

一三　「現実の読者」たる「私」は、たとえば、「定職のある、研究者になるべく訓練された、二一世紀の初めの、東アジア人の、男の読者」(Staley, *Reading with a Passion*, pp. 4参照）として、なんらかのイデオロギーやバイアスを免れない。

一四　注二参照。

一五　これは、「宗教学者」柳川啓一が、ノーマン・ブラウンのアフォリズム（Norman O. Brown, *Love's Body* (New York: Vintage Books, 1968 [1966]), p. 199を引いて「人文科学」について述べた言葉、「（人文科学は）書籍のフェティシズムと解釈者のシャマニズムの結合」（柳川啓一『祭と儀礼の宗教学』一九八七年、一〇頁。ただし、（　）内は柳川による補い）、による。柳川によると、「シャーマニズムとは、術者に神がのりうつって、お告げを垂れることをいう」とあるが、この定義には、その筋の専門家からは異論が出されるかもしれない。

一六　この種の推測は、あらゆる概説書、注解書のたぐいで行なわれるものであるが、日本語で読めるものとして、大貫隆『世の光イエス』（福音書のイエス・キリスト―④）講談社、一九八四年、一一―四六頁をあげておこう。このパピルスにかんする若干の解説は、Kurt Aland・Barbara Aland, *Der Text des Neuen Testament: Einführung in die wissenschaftlichen Ausgaben und in Theorie wie Praxis der modernen Textkritik* (Stuttgart: Deutsche

Bibelgesellschaft, 1989²), S. 67, 94f., u. 109. また、Bruce M. Metzger, *The Text of the New Testament* (Oxford: Oxford University Press, 1969²). 橋本滋男訳『新約聖書の本文研究』聖文舎、一九八三年(改訂二版)、なども参照。

一七 そのURLは、表が、http://rylibweb.man.ac.uk/data1/dg/text/frag2.htm 裏は、http://rylibweb.man.ac.uk/data1/dg/text/frag3.htmである。

一八 Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece* (Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2006²⁷ [9. korrigierter Druck]), p. 309.

一九 同じような作業が、田川建三『書物としての新約聖書』勁草書房、一九九七年、三五六―三五八頁でなされており、二番煎じのように見えて心苦しいが、叙述の都合上必要なのでご寛恕願いたい。

二〇 大貫隆・山内眞監修『新版 総説 新約聖書』日本キリスト教団出版局、二〇〇三年、一四一頁。小林稔・大貫隆訳『ヨハネ文書』(新約聖書Ⅲ)岩波書店、一九九五年、の「ヨハネによる福音書 解説」(小林稔)でも、「一世紀末、おそらく九〇年代に成立したとされている」(一四四頁)となっている。

二一 この引用全体は、Klaus Wengst, *Bedrängte Gemeinde und verherrlichter Christus: Ein Versuch über das Johannesevangelium* (München: Chr. Kaiser, 1990²), S. 180. また、この引用文中の終わりの部分の引用は、Philipp Vielhauer, *Geschichte der urchristlichen Literatur: Einleitung in das Neue Testament, die Apokryphen und die Apostolischen Väter* (Berlin und New York, 1975), S. 460. ちなみに、前注二〇であげた『新版 総説 新約聖書』の記述では、このパピルスについての議論はないが、その執筆者である大貫隆は、注一五であげた自著『世の光イエス』以来、ヨハネ福音書の記述年代や記述場所にかんしては、一貫してこのウェングストの仮説を支持している。さらに、小林稔・大貫隆訳『ヨハネ文書』(新約聖書Ⅲ)岩波書店、一九九五年、一四三―一四四頁の「ヨハネによる福音書 解説」(小林稔)でも、「したがって、このパピルスの存在からヨハネ福音書は二世紀の初めにはエジ

プトで流布していたことになる。／以上のような点から、一世紀末、おそらく九〇年代に成立したとされている」（一四四頁）と記述されており、むしろこのP^{52}をめぐる議論がもっとも重要な判断材料となっている。

二二 Colin Henderson Roberts, *An Unpublished Fragment of the Fourth Gospel in the John Rylands Library*, (Manchester: Manchester University Press, 1935).

二三 Metzger, *op. cit.*, p. 39. 邦訳、三八頁。

二四 *ibid.* 邦訳、同頁（ただし〔　〕内は佐々木による）。

二五 *ibid.*, p. 39. 邦訳、三八－三九頁。

二六 Papyrus Bodmer IIとも呼ばれる。Metzger, *op. cit.*, pp. 39f. 邦訳、三九－四〇頁参照。

二七 Papyrus Chester Beatty Iとも呼ばれる。Metzger, *op. cit.*, p. 37. 邦訳、三六頁。

二八 Papyrus Bodmer XIV, XVとも呼ばれる。Metzger, *op. cit.*, pp. 41f. 邦訳、四一－四三頁参照。

二九 Papyrus Oxyrhynchus 3523とも呼ばれる。K. Aland・B. Aland, *op. cit.*, S. 321参照。

三〇 Metzger, *op. cit.*, pp. 36-37 a. 41-42. 邦訳、三六、三九－四〇頁参照。

三一 Bernhard Mutschler, *Das Corpus Johanneum bei Irenäus von Lyon: Studien und Kommentar zum dritten Buch von Adversus Haereses* (Tübingen: Mohr Siebeck, 2006), S. 1などを参照。アンティオキアのテオフィロス(Theophilos, 一八〇年ごろ活躍）の文書にも、ヨハネ福音書からの逐語的引用とも思われるものが見られる。それは、マルクス・アウレリウス帝の死について触れているので、その死の年の一八〇年以降の著作とされる『護教論（アウトリュコスに宛てて〔*ad Autolycum*)）』二・二二の次のようなものである。ἐξ ὧν Ἰωάννης λέγει· Ἐν ἀρχῇ ὁ λόγος, καὶ ὁ λόγος ἦν πρὸς τὸν θεόν：そのなかのヨハネが言うには、「初めに言葉が〔あった〕。言葉は神とともにあった」（ヨハネ福音書一章一節、ただし、現在の福音書では最初の文に「あった」にあたる動詞ἦνがあ

るが、ここにはそれがない)。また、この「ヨハネ」は「使徒ヨハネ」と言われているわけではない。いずれにせよ、テオフィロスはほぼエイレナイオスと同時代人である。C. K. Barrett, *The Gospel According to St John: An Introduction with Commentary and Notes on the Greek Text* (London: SPCK, 1978[2]), p. 112によるo。また、この『アウトリュコスに宛てて』は一一世紀の写本によって現存するものである。Edgar J. Goodspeed, *A History of Early Christian Literature* (Chicago: The University Chicago Press, 1966), p. 117f. 石田学訳『古代キリスト教文学入門』教文館、一九九四年、一九一―一九四頁などを参照。

三　バーナード (J. H. Bernard) は、自身の注解書 *A Critical and Exegetical Commentary on the Gospel According to St. John* (The International Critical Commentary) (Edinburgh: T. & T. Clark, 1928), lxxiff.の他、当該箇所の注解において、『バルナバの手紙』、『イグナティオスの手紙』、『ポリュカルポスの手紙』、『ヘルマスの牧者』、『ディオグネートスへの手紙』、『十二使徒の教訓』について、ヨハネ福音書との関連を指摘している。しかし、これらの文書にかんしては、それぞれの文書自体の著作年代や、史実を知るためにどの程度信頼できるか、などの点が問題となる。そもそもバレットによれば、「ヨハネ〔福音書〕に言及しているとまともに主張しうる文は『使徒教父文書』の中では、イグナティオスにしかない」(Barrett, *op. cit.*, p. 110. 〔 〕内は佐々木による補い)。イグナティオス (Ignatios) は一一〇年―一一八年の間にローマで殉教の死を遂げたとされるアンティオキアの主教であるが、彼の手紙とヨハネ福音書の類似している箇所をいくつかギリシャ語で比較した後、バレットは、「イグナティオスが第四福音書〔ヨハネ福音書〕を読んでいたことを証明するものは、〔イグナティオスの〕文のうちにはなにもない。しかし、…〔両者の〕思想のあいだの一般的な親近性はじゅうぶん確かめられる」(*ibid.*, p. 111. 〔 〕内は佐々木による補い)。それに対して、バレットより五〇年古い注解書であるバーナードの方は、「イグナティオスは、ヨハネ福音書の教えを、そしておそらくその本文を知っていたことを示している」(Bernard,

op. cit., lxxii) としている。こういった、使徒教父がヨハネ福音書を知って利用していたという点で積極的な意見については、R. E. Brown, *The Gospel According to John: Introduction, Translation, and Notes* (The Anchor Bible) (New York etc.: Doubleday, 1966), Vol. 1, LXXXXなども参照。

三三 バーナードは、この『ペテロ福音書』が一五〇年以前に書かれたものとして、ヨハネ福音書の著作年代の推定に役立つと考えている(Bernard, *op. cit.*, lxxiv)。しかし、この福音書の日本語訳に付された解説(小林稔執筆)では、「四つの福音書を前提しているので、上限はヨハネ福音書の成立以降」(日本聖書学研究所編『聖書外典偽典6』(新約外典Ⅰ) 教文館、一九七六年、一四四頁) とあって、ヨハネを利用したということで、すでに結論が出てしまっている。両福音書を合わせて考えようとすると、議論が循環してしまう。

三四 バーナードは、この文書も一五〇年以前に書かれたものとして、ヨハネ福音書の著作年代の推定に役立つと考えているが(Bernard, *op. cit.*, lxxiv)、こんにち、この行伝はもっと後代の作(日本聖書学研究所編『聖書外典偽典7』(新約外典Ⅱ) 教文館、一九七六年、一二四頁の解説 (大貫隆) によれば「三世紀末ごろ」) と推定されている。したがって、ヨハネ福音書の著述年代の確定には用いることはできなくなる。

三五 これは二世紀中ごろの文書とされるので、ヨハネ福音書との近似について詳細に検討してみる余地はあるかもしれない。Edgar J. Goodspeed, *op. cit.*, p. 22.邦訳、四四頁などを参照。

三六 ユスティノスにかんしても、バーナードは、「彼〔ユスティノス〕が第四福音書〔ヨハネ福音書〕を知っていた痕跡は明らかである」(Bernard, *op. cit.*, lxxv.〔 〕内は佐々木による) としているのに対して、バレットによれば、「疑いようもない類似性はあるものの、文献的な依存関係〔つまりユスティノスがヨハネ福音書そのものを読んでいたということ〕の確たる証拠はない」(Barrett, *op. cit.*, p. 111. 〔 〕内は佐々木による補い) とされる。田川『書物としての新約聖書』九〇―九一頁も参照。

三七 バレットは、この一九四〇年に明らかになったメリトーンの文書にかんしては、著作年代が一六〇―一七〇年として、ヨハネ福音書との関連について肯定的であり、「メリトーンが、ヨハネに特有な福音書の素材を知っていたことは疑いない」(Barrett, *op. cit.*, p. 112) としている。ただし、ヨハネ福音書そのものを知っていたと言わずに、「ヨハネに特有な福音書の素材」といっている点に注意が必要だろう。「ヨハネに特有な福音書の素材」とは、ラザロの復活の話(一一章三九―四一節=「受難について」七八)、τίτλος(「罪状書」一九章一九節=同九五)やὑψόω(「あげる」三章一四説=同)といったギリシャ語の使用である。メリトーンの『受難について』については、Goodspeed, *op. cit.*, p. 113. 邦訳、一八六―一八七頁などを参照。

三八 これは一七五年ころの著作とされるが、ギリシャ語版が見つからなければ、細かいことは言えないのではないか。この著作はすでにほぼエイレナイオスと同時代といえる。

三九 この頌歌の発見者レンデル・ハリス(James Rendel Harris, 1852-1941)は、その著作年代を一世紀とするようであるが(Bernard, *op. cit.*, cxlvi. ハリスの著書は、J. R. Harris and A. Mingana, *The Odes and Psalms of Solomon*, 2 vols., [Manchester, 1916, 1920])、こんにちでは二世紀半ばと見る学者が多い。この頌歌がヨハネ福音書を実際に知っていたかどうかはともかく、「ヨハネ福音書や手紙の特徴」(Goodspeed, *op. cit.*, p. 85. 邦訳、一四二頁)をそなえていると見るのは通説である。大貫隆は、『ソロモンの頌歌』は間接的ながらヨハネ福音書を知っているかも知れない、と書いている(『世の光イエス』、三〇頁)。

四〇 エピファニオスは、著書『薬箱(*Panarion*)』(『全異端反駁論』)五一・二―三において、ヨハネのロゴスの教説を拒否することで「アロゴス派」と呼ばれた異端者たちについてふれ、彼らはヨハネ福音書もヨハネ黙示録も受け入れず、それらを異端者ケリントス(Kerinthos, 一―二世紀)の作としていると報告している。そうだとすれば、ヨハネ福音書を一世紀のものと考えうる、という推測である(Bernard, *op. cit.*, lxxivを参照)が、エピファ

ニオスの著作の「資料としての信頼性は低い」（「エピファニオス」日本基督教団出版局『キリスト教人名辞典』一九八五年）そうである。

四一　バシレイデスは、一二〇―一四五年頃ローマで教えたキリスト教グノーシス主義の代表的教師であるが、ヒッポリュトス『全異端反駁』七・二二にあるバシレイデスの著作の要約とされるものに、彼の言葉としてヨハネ一章九節が文字通り引用されているとされる。それが本当にバシレイデスの言葉だとすれば、ヨハネ福音書が「早い時期に、たしかに一五〇年以前に」バシレイデスたちによって用いられていた、というのが「大胆すぎる推測」だとしても、ヨハネ福音書はすでに、特別に重要性のあるキリスト教文書だと考えられていたのだ、と推測されるたりする。Bernard, *op. cit.*, lxxiiiを参照。

四二　ヘラクレオンはイタリアのグノーシス主義の教師で、プトレマイオス（Ptolemaios, 二世紀頃）と並んでヴァレンティノス派グノーシス主義の指導者であり、ヨハネ福音書についての最初の注解書を書いたとされ、それについてオリゲネスの『ヨハネ福音書注解』で言及されている。ただし、そういったヘラクレオンの注解の断片では、「ヨハネ」という著者名には触れられていないようである。しかしエイレナイオス（『対異端反駁』一・八・五）によれば、プトレマイオスは、ヨハネ福音書を「主の弟子ヨハネ」（＝使徒ヨハネ）によるものとしているようにもみえる。また、一部でヴァレンティノス（Valentinos, 二世紀、一四〇年ころから二〇年間ほどローマで活動した）その人が著者ではないかとされた（エイレナイオス『対異端駁論』三・一一・九）、『真理の福音』にも、ヨハネ福音書との多くの類似が見られるとされる。バレットは、「『真理の福音』の著者がヨハネを読んでいたということは、まったく確実だということはないとしても、ありそうなことに思われる」（Barrett, *op. cit.*, p. 114）、と書いている。ただし、この『真理の福音』の著者や成立年代については、たとえば、荒井献他訳『ナグ・ハマディ文書Ⅱ　福音書』岩波書店、一九九八年、三七八頁の「解説」（荒井献）のように、異論もあり、著作年代を遅く

考える立場からすると、ヨハネ福音書の早い時期への位置づけのための証拠としては使えない。

四三 グノーシス主義（とりわけヴァレンティノス派の）文献におけるヨハネ福音書文書をはじめとした新約聖書正典諸文書の引用の問題の扱いにかんしては、慎重でなければならないだろう。カンペンハウゼンは、「ヴァレンティノス派において新約聖書本文への暗示と推定されるものは、しばしば主張されるほど、あきらかに的外れというわけではない」(Hans Freiherr von Campenhausen, *Die Entstehung der christlichen Bibel* [Tübingen: Mohr Siebeck, 1968], S. 166, Anm. 171) としながらも、たとえば、「真理の福音」にかんしては、「成立年代が不確かなので、まさしくその理由により、正典成立史のために〔早い時代に正典が成立していたということを主張するために〕は、それらのテキストを用いることはほとんどできないのである」(*ibid.*, S. 166. ただし〔　〕内は佐々木による)、と書いている。ちなみに、田川『書物としての新約聖書』、九一―九二頁では、エピファニオスの『薬箱』三三・三―七の中に保存されたヴァレンティノス派のプトレマイオスのものとされる「フローラへの手紙」の一節について、それは「ヨハネ福音書一・三の引用である」とされている。カンペンハウゼンも「プトレマイオスはヨハネ福音書も用いている」(*ibid.*, S. 198) と書いているが、この手紙の著述時期は二世紀半ば以降を考えているようである (*ibid.*, S. 98)。ヴァレンティノス派の文書とされるものの年代決定の難しさについては、Wouter J. Hanegraaff (ed.), *Dictionary of Gnosis & Western Esotericism* (Leiden・Boston: Brill, 2005), Vol. II, pp. 1144-1146なども参照。注四〇、四二も参照。

四四 Mutschler, *op. cit.*, S. 2.

四五 *ibid.*, S. 3参照。

四六 *ibid.*, S. 4 und *ibid.*, Anm. 19.

四七 *ibid.*, S. 8.

四八 *ibid.*, S. 6, Anm. 30.

四九 本稿で参照・利用したのは、次のテキストである。Irénée de Lyon, *Contre les hérésies* (Sources Chrétiennes), Livres I-V (Paris: Les Éditions du Cerf, 2002).

五〇 この箇所は、ギリシャ語断片が残っている。なお、エイレナイオスは、ヨハネ福音書やヨハネの黙示録は、「主の僕」(『対異端駁論』三・一・一)、つまり「ゼベダイの子」、「使徒」たるヨハネの作とみなしている。ただし、「今日この伝統的な見解をなお固持するのは少数の保守的研究者のみである」(大貫隆『世の光イエス』、一三頁)。

五一 たとえば、Irénée de Lyon, *Contre les hérésies: Dénonciation et refutation de la gnose au nom menteur* (Traduction française par Adelin Rousseau) (Paris: Les Éditions du Cerf, 1984), pp. 683-707なども役に立つ。

五二 ムッチュラーは、第三巻についてそういった作業を行なった。Mutschler, *op. cit.*, S. 529-534参照。

五三 Mutschler, *op. cit.*, S. 523参照。

五四 Irénée de Lyon, *Contre les hérésies*, Livre III, Tome II, p. 142. この個所のラテン語原文は、ヴルガタ訳 (*Biblia Sacra iuxta Vulgatam versionem* [Stuttgart: Württenbergische Bibelanstalt, 1975²], p. 1638) のヨハネ福音書一章一節—五節とは、四節の冒頭 in eo uita erat の eo だけが異なり (ヴルガタ訳では ipso)、しばしば議論される異読の問題にかかわっては、ネストレ=アーラント二七版の読みを支持する。

五五 ギリシャ語本文は、Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece* による。

五六 ラテン語訳では「ヨハネによる」が抜けているが、これは、ラテン語への翻訳者が目にしていたエイレナイオスの『反異端駁論』ギリシャ語版で、このκατὰ Ἰωάννηνがたまたま抜けていためだろうとルソー (A. Rousseau) は注釈している。Irénée de Lyon, *Contre les hérésies*, Livre III, Tome I, p. 285参照。

五七 ただし、第三巻に限ってだが、エイレナイオスがヨハネ福音書を明示的に、すなわち「(福音書記者) ヨハネが」

言った、として引用している福音書の箇所で、ギリシャ語断片が残っているものは、第三巻の二二・二で、もし、イエスがマリアから生まれた完全な人間でなければ、「主の弟子ヨハネは、〔次のように〕イエスについて書かなかっただろう」（ただし〔　〕内は佐々木による）として、ヨハネ福音書四章六節 Ὁ οὖν Ἰησοῦς κεκοπιακὼς ἐκ τῆς ὁδοιπορίας ἐκαθέζετο: イエスは旅に疲れて座っていた、を引用したものだけである。ただし、エイレナイオスでは、οὖν は δὲ となっている。しかし、οὖν の方がヨハネ福音書のギリシャ語らしいと言える。John H. Moulton, *A Grammer of New Testament Greek*, Vol. IV: Style (by Nigel Turner) (Edinburgh: T. & T. Clark, 1976), pp. 74f.などを参照。

五八 Bart D. Ehrman, Gordon D. Fee, and Michael W. Holmes, *The Text of the Fourth Gospel in the Writings of Origen* (Atlanta, Gerogia: Scholars Press, 1992).とりわけ、同書pp. 345-367を参照。

五九 Mutschler, *op. cit.*, S. 523-525の表に即して数えた数字である。

六〇 *ibid.*, S. 523-528参照。

六一 Irénée de Lyon, *Contre les hérésies: Dénonciation et refutation de la gnose au nom menteur*; pp. 698-699参照。

六二 こんにち多くの研究者たちは、ヨハネ福音書二一章はのちに付加されたものとする。

六三 第五巻五・二＝ヨハネ一一章二五節「私は復活であり、命である」、第四巻七・三＝ヨハネ一四章六―七節「私は道であり、真理であり、命である…」、などである。

六四 第三巻二一・五など。

六五 同様の傾向はオリゲネスの著作から復元された「ヨハネ福音書」にも見られ、興味深いが、こういった問題については、稿をあらためて論じるしかない。注五八であげたアーマン（B. D. Ehrman）らの著書の箇所を参照。

六六 M. -É. Boismard et A. Lamouille, *Un Évangile Pré-Johannique* (Paris: Librairie Lecoffre, 1993, 1994, 1996), 3 vols.

六七　ブワスマールたちは「前ヨハネ福音書 un evangile pré-johannique」と呼んでおり、こんにちわれわれがヨハネ福音書ギリシャ語原典とするよりも前の、よりがんらいのヨハネ福音書テキストと考えたいらしい。しかし、その探究のしかたは、本稿の「はじめに」にかいたような「史料批判」・「文献批判」とは異なり、ひとりのギリシャ教父の著作から福音書を再構成しようとするものである。その主張や結果は—もし正しいとすれば—かなり重大なものである。「これはもう決定版で」、「玄人にも」、「素人でも」、「まずこの一冊ということになる」（田川『書物としての新約聖書』四〇〇頁）ネストレ＝アーラント版に対して、ある種の見直しを迫るからである。「本文批判」の方法論という点でいえば、ブワスマールの主張は、現存するギリシャ語写本を中心とするのではなく、もっと「教父たちPères」の証言、つまり福音書の引用を重視・検討せよ、ということである。期せずして、この独創的な研究は、私の素朴な疑問から出発した詮索とリンクしたのである。

六八　正確に言うと、ブワスマールによって再構築されたクリュソストモスの「前ヨハネ福音書」には、こんにちのヨハネ福音書プロローグ（一章一節—一八節）のうち一章六—八節は存在しているのである。これは非常に興味深い。なぜならこんにちのヨハネ福音書研究者の多くは、「文献批判」にもとづき、この部分を、むしろほんらいの「プロローグ」への「付加・挿入」とみなすからである。しかし、このクリュソストモスが利用したのかもしれない「前ヨハネ福音書」によるなら、「初めに」あったのはむしろ「付加・挿入」の部分で、そのあとにロゴスの先在（一節）やらロゴスの受肉（一四節）といった、この福音書の要とされる思想を含んだ「プロローグ」が挿入されたことになる。Boismard et Lamouille, *op. cit*, Vol. I, Tome II, pp. 209f. et pp. 315f.などを参照。

六九　田川『書物としての新約聖書』、九八頁参照。

七〇　大貫『世の光イエス』、一三頁参照。

二〇〇七年四月一九日